

運野四九内

やまとの翁

むかしくある處に、運野四九内といふ少年が居りました。
 なぜこんな變てこな名前かといふに、四九内のするをといつたら
 何時だつて、甘く行つたといふことは一つもない。することな
 す事、皆鶡の嘴の様に食ひ違つてばかり行くからであります
 ある時、此四九内は、新しい家へ奉公に行つて、「どうか、一
 年奉公しますから、お給金の代はりに、麥畑をすこし下さいま
 せんか」と申し込んだ所が、主人も早速承知してくれましたの
 で、「先づよかつた」と安心をして、貰つた麥畑に種を播いて、せ

せと奉公大事に
勉めて居りまし
た。

すると、四九
内の麥の生長く
なることの早い
ことよいつたら
ない位で、主人
の家の麥は、ま
だやっと、莖が
伸びた頃には、



もう疾づくに穂
が出来て居るし
主人の麥がやっ
と、穂を出した
時分には、四九
内の麥は、眞黄
に實つて居りま
す。四九内は夫
を見て

『さあ、明日は
いよく麥を

刈らうかな』

などと言つて、獨りて喜んで居りますと、其晩になつて急に雷がなるやら、霰が降るやらして、折角樂しみにして居た麥は、散々になつてしまいました。

『之では、どうも仕方がない、今度は又別の家へ行つて見よう不圖かすると、運が向くかも知れないから』

といふので、其處を出て、他家に行きまして、二年の間奉公しますから、どうか其小馬を一匹呉れませから、といつて見ました所が、その主人も承知してくれましたから、四九内はやがて此家に居て、だんくとその小馬を馴らして仕込みまして、とうく立派な馬に仕立てました。そこで四九内は

「今度こそは、此馬で何か儲けようかな」と考へて居ますと、運のよくないといふのは仕方のないもので、其晩、澤山な狼が厩に這入つて来て可愛相に其馬を、ずた／＼に引き裂いて食つてしまいました。

四九内はもう泣かぬ許りです。「今度又他に行つて見よう、少しは運がよくなるかも知れない」

とう／＼三度目に、一軒の家へ行きますと、其處の墓地に大きな石がある、何時からあるのか、分らないし、幾人かゝつたつて動かすことが出来ない位の夫は／＼大きな石なのです。そこで四九内は、此大石を呉れよば、一年間奉公しなすようと申した所が、其家の主人も承知してくれましたから、四九内は

又々其家へ奉公しました。所が、彼の大きな石の上には、立派

六

花が咲いて来て、赤だの金だの銀だの、夫はくく色々な草花
が、石に咲いて来ましたから四九内は「さー甘いぞ、今に此が
己の石になるのだ、誰も動かすことが出来ないから、大丈夫だ」
と、毎朝見るとは楽しんで居りました。

所が運の悪い時といったら仕様がな。或夕方大きな雷が
落ちて、此見事な大石が、丸で粉微塵になつて仕舞つた。

四九内は、もう困つて仕舞つて、何故自分はこの様に運が悪
いのだらうと、獨りぼろく泣いて居りますと、お友達が
いろくくと慰めてくれて、

「成程君は、どうも運がよくない様だ、夫では、一つ此國の天

子様の所へ参つて、御願ひ申して見るがよい、天子様は、國
民の父だから、不運の人には、屹度よいことを與へて下さるか
ら』

といつてくれますから、夫も尤もだと四九内は、夫からすぐ天
子様の所へ行きました所が、天子様は早速朝廷の役人にしてく
れました。

或日のこと、天子様は四九内を召ひ出して申されますには、
「さてく四九内、お前ほど運のよくない者は先づあるまい、
これまでお前のする事に一つとして甘く行つた事がないじや
ないか、夫で、今日はお前の運試しに一つ面白いことを考へた
のだ」

といつて、天子様は、そこへ同じ様な丸い筒を三つ取り出して
 仰せられるは、

『さて、此三つの筒は、一つは金が入ってるし、一つは木炭が
 入ってるし、一つは土が這入って居る、そこで、お前は、
 其金の這入ってる筒をいひあてれば、いつまでも、此國の役
 人になつて居られる、但し木炭の這入ってるのをつかめば、
 お前は鍛冶屋にならねはならぬ、夫からひよつとかして、土
 の這入ったのが當れば、其時は仕方がない、もう此國には居
 ることは出来ないのだ、』

そこで、四九内も、これは一生の一大事と思ひましたから、其
 三つの筒を取り上げて、あれか、これかと考へた末、とうく

一つを取り出して、『これには金が這入っています』と申し上げた。所が、夫をうちわって見ると、豈計らんや、土の筒であった。四九内は、もう泣かぬ許りです。

さて、申し渡しを通り、四九内は、又々こゝを出て行かねばなりませぬ。然し天子様も、あんまり、可愛相だと思し召されたので、馬一匹に、刀や衣服などを下さいました。

四九内は、しかたがない、其馬に乗って、こゝを出て行きまして、たが、其日一日、行っても行っても、人の家が見當りません、翌日になって、又行ってもく、人の家が見當らない、もう、お腹が空く、足勞れはする、おまけに、馬も何も食べないのですから、お腹が空いたと見えて、もう、一步も進まない様にな

りました。

所が三日目になつて、ひよつと向ふの方を見ると、乾草が一塊り積み重なつて居る、そこで四九内は、やれくうれしや、まづ馬の食物にだけ、ありついた、どれ早く行つて、馬に食べさせましよう、と思つて、急いで其側まで行きました所が、どうしたのか、其乾草が、中から、ぶすくとくすほつてきて、見てる中に、パツと火が燃え上つて來ました。四九内は、之を見て、又力を落して、『おやく』といつて、あきれ立て居ますと、不思議にも、其火焰の中から、

『どうか、助けて頂戴、どうか助けて頂戴』

と、呼ぶものがあります、四九内も、不思議に思ひましたが

『だって、火の中だもの、助けるにしても、側へよれないじゃないか』

といふと、又火の中から

『夫じや、卿の劍をさし出して下さい。夫につかまるから』

といひます、奇體だなあと思ひましたが、先づいふ通り、腰の刀を火の中へさし出してやった所が、怪しむべし、一匹の蛇が、くるくと、其刀へ巻きついて、出てきました。

『オヤ〜蛇だったのか』と 惘れて居ますと、其蛇は、鎌首をちよいと上げて、

『折角出して下さったのだから、序でに私の家まで送って下さいな』といふ。

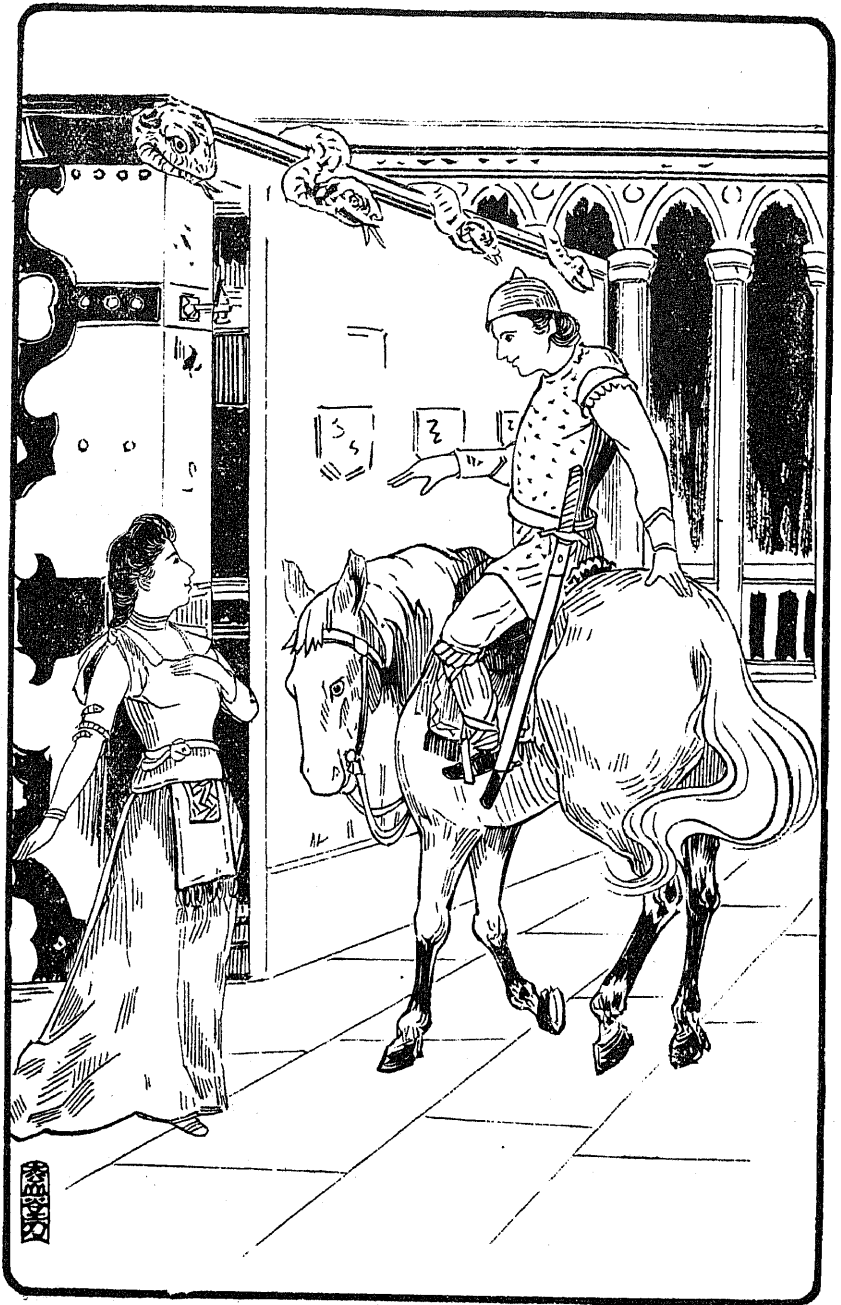
『お前の家てのは どこ?』と問ふと

『夫はね、私しが鎌首を向けるから、其方へお馬を進めて下さればいゝの』といひます。

四九内も、別にどこと行って、行きつくあてもないのですから、蛇のいふまゝに、送つて行く事にして、馬の前の所に乘せてやうて、一所に行きますと、蛇は鎌首をもつて、あちら、こちらと道を教へて行きます。

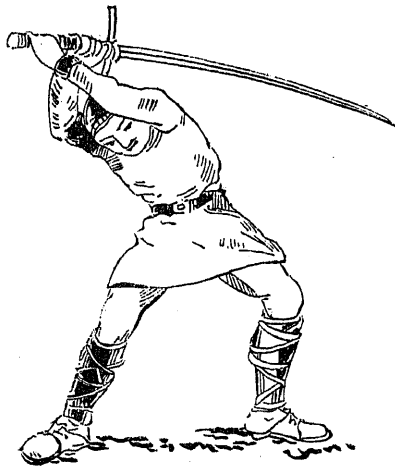
暫く行きました所が、とうく立派な門構のれ屋敷へ着きました。すると蛇は、馬から下りて

『こゝが私しの家なのよ、一寸、こゝで待つて居て頂戴な、私すぐ出てくるから』



といつて、門の中なかに這入はいつて行ゆきました。

暫しばく待まつて居ゐますと、門もんが又またすーと開あいて、そこへ一人ひとりの夫それは可愛あいいといつたら、又またとない位くら可愛わいい美うしいお姫ひめ様さまが出でて來きました。そして、たゞ不思議ふしぎだくと啼なきれてる四九内よくないを伴ともなつて門もんの中なかへ這入はいつて行ゆきました。門もんの中なかへ這入はいると、そこいらの立派りっぱな事こと！然しかし、四九内よくないは、もう三日かも食たべないのですから腹はらが空すいて、そこどこの騷さわじやない、『あゝ何かなに食たべたいなあ』と思おもつて居ゐると、其そのお姫ひめ様さまが、おいししく御馳走おちせうを澤山たくさんお膳ぜんに盛もつて出だしてくる、『どうか、召めし上あれ』といはれるので、早速さつ頂たいて食たべて仕舞まつて、やっとお腹なかが出で來きた、馬うまはと見みますと、馬うまも最前さいぜんから、御馳走おちせうにありついて居ゐる。



やつと御飯がすんで落ち付いた所で、お姫様は、立派な劍を
持ってきて四九内に申しますには。

『あのう、私はさきの蛇なのよ、お前さんに命を助けて貰った
から、何かお禮をしたいと思つて、こゝまで来て頂いたの、夫

で、この劍はね、不思議な力のあ
る劍で、之を抜いて、敵の前で、
たゞうちふると、夫れ丈けで敵は
幾人でも、ぼたくと斃れてしま
うの、之をお禮に上げるから、お
前さん、この劍を持って、之から
お隣りの國へ行らっしゃい、丁度

戦争が始つて、お隣りの天子様が勇士を招いて居るから、そこに行くくと屹度功名を立てることが出来て、お仕舞ひには、天子様の婿様になれるのですよ、併し、七年の間といふものは、決してく其劍のことは誰にもいってはならないのですから』といふので、其劍を四九内に呉れました。

(つづく)

